

## 独立混成第八十旅団

いくさのことを語る前に、ハイラルにおける陸軍の諸部隊の移動駐留について書いておかねばならない。私の着任の三ヶ月前、即ち、昭和十九年九月の時点では、此の都市には第六軍司令部（昭和十四年創設）、第二十三師団（昭和十三年創設）それから第八国境守備隊（昭和十三年創設）があり、不敗の陣容を誇示していた。しかし、これはあくまでも誇示であり、戦争になれば負けることに決まっていたのである。それはノモンハンの負けいくさを引用すればわかることでもあるし、またその後の関東軍司令部における参謀部の度重なる兵棋演習によってもそのことは立証され、時の統裁の関東軍司令官をして「何故ハイラル地区では日本軍は負けるのだ」と嘆かせたという。その第二十三師団が昭和十九年十月にフィリピンに抽出転用されて行ったのであるから、そのあとは一言でいえば大変な出来事であった。

私の部隊は二十三師団の歩兵第六十四連隊（一八部隊）が残置しておいてくれた部隊で、私が行った十二月下旬頃は、連隊の敷地内のほとんどの兵舎がガラ空きで、昼間でも幽霊が出来そうな雰囲気があり、舎内は散らかり、床には鉄帽が転がっていた。余程、慌しく出発していったのであろう。第二十三師団はノモンハン戦の教訓を生かし、機械化され、日本一の師団と

いわれていたのであるから、これの移動はハイラル防衛を陸軍が見限ったと断言してもよい位の大事件であつた。しかし、それでもなお、ソ連に対して虚勢を張る必要から、急きよ、第八国境守備隊を改編して第一一九師団を創設し（昭和十九年十月）、二十三師団の残置部隊に徴集兵、応召兵を加えて独立混成第八十旅団を創つたのである（昭和二十年四月）。

第二十三師団がいなくなった以上、その上級司令部たる第六軍司令部も存在の意味がなくなり、これは昭和二十年二月に軍司令官十川次郎中将以下、南支に転出して行つた。この六軍司令部の移動は隠密裡に行なわれたが、私達の旅団司令部の經理の見習士官は知っているらしく「軍司令部の經理の仕事が本来の仕事と大分違ふ。きつと何処かへ移動するのであらう」と彼は推測していたが、まさにその通りになつた。次に知っていたのは、軍人会館や将校会館の姐ぢやん達である。

多分、部課単位の送別会があることから察していたのである。この点、日本の防諜は完全に失敗であつたと断言出来る。それは師団長官舎にはチャンと塩沢という表札が門柱につけられていたことでも分かる。たしか昂々溪以北は軍事機密地帯とかで、一般人は日本人でも特別許可証がなければ、汽車に乗つても入れない位、嚴重に秘密性が保持されていたが、一步この地帯内に入つてみると、どの将校の官舎にも正式の姓名を記した表札が掛けられてあり、何のための防諜かといいたいくらいであつた。少なくとも中隊長以上は偽名を使うとかして、身分を

秘匿する必要があつたのではなからうか。

六軍司令部の移動と同じ頃、私達新任将校は新任の見習士官達と共ども、一八部隊の空兵舎におち込まれ、一ヶ月間、厳寒の候を初年兵と同様に、将校教育と称して、飯上げや、掃除、軍人に賜りたる勅諭の全文の毛筆清書などをさせられてしごかれた。そして来隊した十川軍司令官が「日本の国軍将校十六万人、その動静は日本の運命を左右する。私は今後とも、貴官等将校の挙措動作に特に注目したい」と訓辞し、料理屋遊びの味をやつと覚えた私を慌てさせたが、訓辞後、旬日を経ずして軍司令官は去つた。去る少し前、私達の教育隊を特別に視察されとの噂があり、私達は区隊長の指揮の下、雪を兵舎内の廊下に撒き、藁で床を擦すつて磨き上げたものだ。その時、九大医学部出身の西原衛生部見習士官が感に堪<sup>た</sup>えたように言つた「軍人の偉いのつて本当に偉いんだなあ」と。

私は、あの臨時の私達の教育隊は六軍司令部の移動を隠すための演出ではなかつたのかと思う。

六軍司令部代りに上村幹男中將の四軍司令部がチチハルに来て、ハイラルの一一九師団と私達の旅団を指揮することになった。ある日、私は旅団の軍医部長に「私達の旅団の使命はハイラルですか」と尋ねたら「それが分からないだよ。明日にでも出動の命令が来たら他処へ移動するかも知れないんだ」との返事で、私は守備目的も、出動目的も持つていない面白い旅

団もあるもんだと思った。私の軍医としての仕事は第一大隊付きだから退屈であつた。

将校といつても退庁時を過ぎれば、私服に着替えて自由に振舞つてよいプライベートな時間が一杯あるわけだから、並みの会社員と同じで、馴れればひどく気楽な商売である。医書は「出動地に於ける治療方針」「内科診療の実際」「実地外科手術書」の三冊を揃えていれば大体ことが足り、しかも隊付軍医は三日間以上休養室に入室するようなひどい患者は陸軍病院に入院させなければならぬことになっていたため、病気の軽重の見分けさえ出来ればよいので、仕事は大変しやすかつた。それで私は余命いくばくもないから遊ぶに如かずと考え、金がなくなるまで遊んだ。金がなくなり「ハテ」と困つていたら、経理部の下士官が「状況が差し迫つていますので、給料の前払いをします」と言つて、八月の終わりまでの分か、九月の終わりまでの分か忘れてしまつたが、給料をくれた。それで、またまた、遊び始めた。

工兵隊長は開戦迄に、料理屋に千二百円くらい借金していたらしい。敗戦後收容所で彼に会つた時「あの借金は敗戦で全部パーさ。こんなことになるなら、ついでにもう少し借金して遊んでおけば良かった」といつていた。この幹部候補生あがりの金鵒勲章を貰つていた少佐は仲々愉快な人で、料理屋から朝帰りして彼の家で一緒に朝食をとり、部隊に乗馬で出勤する時、「昨夜の宴会は面白かつたなあ」などと話すのである。たまたま営門から入ると、その日が月曜日で工兵隊長の精神訓話の日に当たつていたことがあつた。工兵隊長の将兵は宮庭に整然と並び

隊長の訓話を待っていた。「あ、今日は僕の精神訓話の日だ。では失礼する」と彼は工兵隊の方へ馬首を巡らした。同じ敷地内の隣が工兵隊なので、何を話すのかと、私は興味を持って医官室から眺めていると、彼は威風堂々と壇上にあがり、おもむろに将兵の敬礼を受け、颯爽と話しているのである。「沖繩で玉砕した兵士に続け」と。昨夜の宴会の話をしたその舌の根も乾かない内に、あんな精神訓話をするとはと、私はあきれ返ると同時に、それ以後どんな偉い人の訓辞や訓話を聞いても驚かなくなった。良い経験をしたものである。

しかし、私は遊んだことを少しも後悔していない。何故かならば、停戦が無ければ、どっちみち私は死なねばならなかったのだから。「松山中尉、お前は余り遊び過ぎるので、憲兵隊からマークされているぞ」と経理部将校から注意されたが、これは私のことではなくて、私によく似た名前の中尉が師団の副官部にいて、師団長の威光を笠にきて、威張り散らすので、怒った憲兵連中が「その〇〇中尉を何が何でも検挙する前祝いの会」を将校会館で開いたことが、私を検挙する会と間違えられて伝えられたのが実相らしい。特務機関にいた軍医によると、給料の三倍を毎月使えば、憲兵隊からマークされたとのことだ。

話を元に戻そう。あとで述べるようにハイラルには一一九師団の一部と、独立混成第八十旅団の大部分がいたのであるが、開戦と同時に既定の作戦に基き、一一九師団は興安嶺に下がり、ハイラルには独立混成第八十旅団のみが残され、あわれ、私達は懸軍万里の棄軍とされてしまっ

たのである。それまでに、このようになることを知っていた要領の良い将校は、上官と喧嘩をしてまでも「命令をさしくって」日本内地へ帰ったとのことだ。そんな噂を聞いても私はどうすることも出来なかった。ただ、大命のまにまに旅団と運命を共にするほか、私の行くどんな道があるというのか。私はソ満国境から汽車で三時間位の所にあるハイラルにいたので、敵の急襲を受ける危険が少なくてまだよかったが、ソ連領のアトポール対岸の国境の街である満州里の将兵は心は大分荒れていたらしい。満札警備隊長として赴任して行った私の旧G部隊長の話では、毎朝、定刻の出動時になっても当番兵が馬を持って来ないのだそうである。当番兵に問い尋ねると、馬掛りの将校から「部隊長の乗馬を余り早く官舎にもって行くな」と命令されていたらしい。どうせ死ぬ身だから、束の間の時間でもノンビリユックリしたかったのである。一説によると軍規風紀の取り締りに当るべき満州里の憲兵自体が、やけのやんぱちで、昼間から酒を呑んで酔っぱらっていたというから、他はおして知るべしである。もちろん、日ソ開戦と同時に彼らの大部分は、ソ連軍の急襲と強襲を受けて戦死した。